

大阪市立大学生活科学部紀要・第48巻（2000）

## 大阪市立大学杉本キャンパスの近代建築について

—近代モダニズム建築をめぐる一考察—

中嶋節子

## Modern Architectures of Osaka City University

SETSUKO NAKAJIMA

## はじめに

大阪市立大学杉本キャンパス(大阪市住吉区杉本3-3-138)は、その前身である大阪商科大学の学舎として、昭和6年(1931)から9年にかけて整備されたことにはじまる。キャンパス内には現在も、創設時に建築された商科大学学部本館(1号館)、商科大学予科校舎(2号館)、商科大学高等商業部校舎(3号館)、図書館・研究室(旧図書館)、体育館(第1体育館)の5棟の建物が残されている。

これらはいずれも昭和初期の近代モダニズム建築運動を背景に建築された建物であり、この時期のモダニズム建築の多くが取り壊されていく現状にあって、日本の近代建築史を語る貴重な存在となっている。

これまで杉本キャンパスの建築をめぐることは、研究者間ではその歴史的意義は認識されてきたものの、これらを詳しく取り上げた研究はみられず、紹介程度にとどまっている<sup>1)</sup>。

こうした状況に鑑み本研究では、杉本キャンパス創設期の建築について、その建築経緯・建築的特徴・設計の背景を明らかにすることで、近代モダニズム建築としての位置づけを試みた。

## 1 杉本キャンパス誕生の経緯

大阪市は、昭和3年(1928)3月、大阪商科大学を設立し、同年4月1日に予科、高等商業部、翌年4月1日に学部を開設する<sup>2)</sup>。開学当初は、天王寺区烏ヶ辻にあった元大阪市立高等商業学校の一部を仮校舎としていたが、開学と同時に新しい敷地を選定し、学舎を整備する計画が進められた。

## 1-1 新学舎建設用地の選定と買収

大学設置申請を目前に控えた昭和3年(1928)2月7日、市会において公立大学設置、ならびに商科大学初年度経常費30万円と、用地買収および学舎新築のための創設費250万円(3ヶ年継続事業)の予算が認められる<sup>3)</sup>。以

後、用地の買収と学舎の建設が具体化されていった。敷地面積は約60,000万坪(198,000㎡)が予定され、うち30,000万坪を寄付で、残り30,000万坪を66万円で買収する計画であった<sup>4)</sup>。

候補地は2、3ヶ所あげられていたとされるが、市南部に位置する住吉区杉本町が、今後の発展が期待できるなどの理由で最有力候補地として選定され、買収が進められた<sup>5)</sup>。最終的に決定された土地は、大阪市住吉区杉本町36番地外70筆、52,500坪(実面積52,488坪)で、現在の旧教養地区と本館地区にあたる。これは昭和3年11月6日の市会で決議された<sup>6)</sup>。52,500坪のうち22,500坪を寄付で、残り30,000坪を一坪平均20万円で買収する計画であった。翌4年4月24日には地鎮祭が挙行されている。

## 1-2 新学舎建設の経緯とキャンパス景観

当初は昭和3年度(1928)に用地買収を完了し、同年度内に予科・高商部学舎の建設を終了、4年度に大学本館、5年度に図書館・研究室を竣工して、6年度までにはほぼ全体が完成する予定であった<sup>7)</sup>。しかし、地主と小作人の反対によって用地買収が予想外に難航し、当初の計画は大幅な変更を余儀なくされる<sup>8)</sup>。最終的に用地買収問題が決着したのは、昭和6年のことであった。

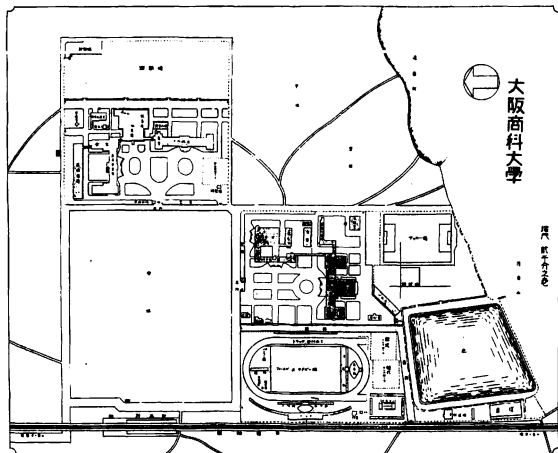
用地買収問題が収束へと向かいつつあった昭和6年10月、学舎の建設が開始される<sup>9)</sup>。工事は、第1～3期工事と付帯工事の4期に分けて行われ、おおよそ昭和6年から8年にかけて、予科と高商部の学舎が建つ現在の旧教養地区が、次いで7年から9年の間に、学部の施設が置かれる現本館地区が整備された[表1]<sup>10)</sup>。

最終的にすべての工事が終了したのは10年2月であった[図1]。工期は3年5ヶ月、総事業費162万5240円と報告されている<sup>11)</sup>。

建築設計は大阪市土木部建築課によって行われ、施工は主要建物については株式会社鹿島組、経済研究所のみ株式会社森下組が請負った<sup>12)</sup>。

〔表1〕 杉本キャンパス建設の工期

第1期工事	昭和6年10月起工同8年3月竣工 高商部校舎 予科校舎 体育館
第2期工事	昭和7年9月起工同8年3月竣工 武術運動練習場 暖房汽罐室 配電室 渡廊下 ほか付帯工事
第3期工事	昭和7年12月起工同9年7月竣工 学部本館 図書館・研究室 書庫
付帯工事	昭和9年4月起工同9年7月竣工 経済研究所
その他工事	昭和10年2月竣工 門塀 柵 自動車庫 倉庫 フィールド・トラック 野球場 テニスコート・スタンド 弓道場 サッカー練習所 射の場ほか



〔図1〕 昭和10年頃の杉本町のキャンパス(市大大学史資料室所蔵)

昭和10年11月には、9～11日の3日間にわたって盛大な落成記念行事が行われている<sup>13</sup>。

## 2 杉本キャンパスの建築

杉本キャンパスに完成した建築は、当時、建築界において注目され、雑誌にもたびたび取り上げられた。

『新建築』では、予科および高商部校舎について、「建築は明快な近代調を帯びた意匠で、細部には稍フランス風なものを見ることが出来るが全体として学校建築として推賞するに足るものである」と評され、体育館は、「ステージジムナジウム」を日本で最初に取り入れた最新の施設として紹介されている<sup>14</sup>。

杉本キャンパスの骨格をなす高商部校舎、予科校舎、体育館、学部本館、図書館・研究室の5棟の建物について、その建築概要と建築的特徴を以下に見ていく。

分析にあたって、大阪市立大学事務局管理課保管の「大阪商科大学関係図面」一式(高商部校舎31点、予科校舎40点、体育館16点、学部本館47点、図書館・研究室52点、その他4点、合計190点)と、同大学大学史資料

室所蔵の文献史料、古写真等を基礎史料とした<sup>15</sup>。

また「建築概要」については、『大阪商科大学六十年史』所収の「工事報告」と、『大大阪』掲載の「大阪商科大学六十年小史」によった<sup>16</sup>。

### 1) 高商部校舎(3号館)

建築概要 鉄筋コンクリート造、3階建

建築面積1,575㎡、延床面積4,447㎡

第1期工事(S6.10起工 S8.3竣工)

設計：大阪市土木部建築課

施工：株式会社鹿島組

平面計画 東西方向の棟を主とし、その両端に北にのびるウイングが取り付く。正面玄関は東西方向棟の中央におかれ、正面玄関を軸にほぼ左右対称のプランとなる。東西方向棟の北側に廊下を通して南側を居室とする片廊下式の平面が採用され、北にのびるウイングへもこの廊下からアプローチする〔図4〕。

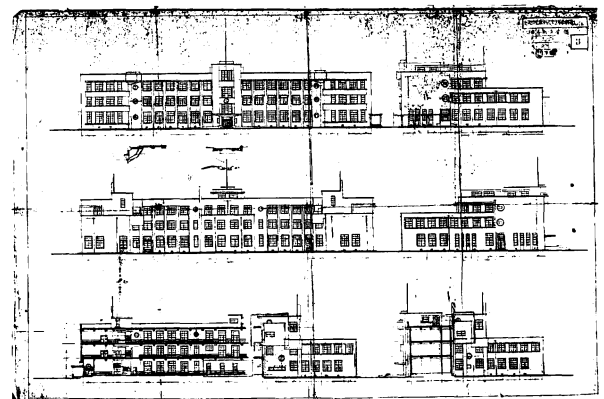
1階は教員室や学生課分室など事務関係室に、2、3階は教室、研究室などに使用されていた。

立面構成 立面は東西方向棟中央の塔を中心に、左右

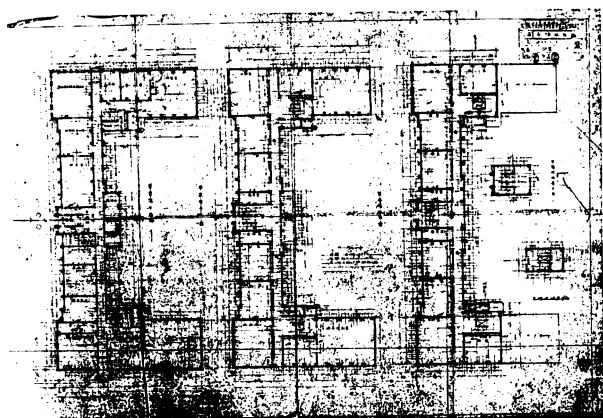


〔図2〕 竣工まもなくの高等商業部校舎

〔昭和十年十一月新学舎竣工記念大阪商科大学〕絵はがきより(市大大学史資料室所蔵)



〔図3〕 高商部校舎「各面立面図」(市大大学事務局保管)



〔図4〕高商部校舎「各階平面図」(市大大学事務局保管)

対称の構成をとる〔図2〕〔図3〕。

南面中央部では、1階から3階まで通る柱形とその上部を繋いで連続する3階窓上部の庇が立面の主要素となり、その他の面では平板面(壁・窓)と連続する庇が壁面を構成する。連続する庇は窓上に止まらず、窓の周囲や壁面上を水平そして垂直にと自由に延ばされる。庇と柱形は、建物全体に貫かれた構成要素として重要な役割を果たしている。

なお、円窓や中央の塔および壁面の切変え部分に用いられた円筒形のヴォリュームによって、杉本キャンパスのなかでは全体としてやわらかい雰囲気のものに仕上がっている。

意匠 窓棧は、矩形窓ではほぼ正方形のグリッド、円窓では幾何学模様のデザインが採用される。現在は取り払われているが、かつては玄関に金属製の柵扉があり、その扉にも幾何学的なデザインが施されていた。

正面玄関の車寄せは、曲線と円によってデザインされる。このデザインは学部本館および図書館・研究室の車寄せと共通する。

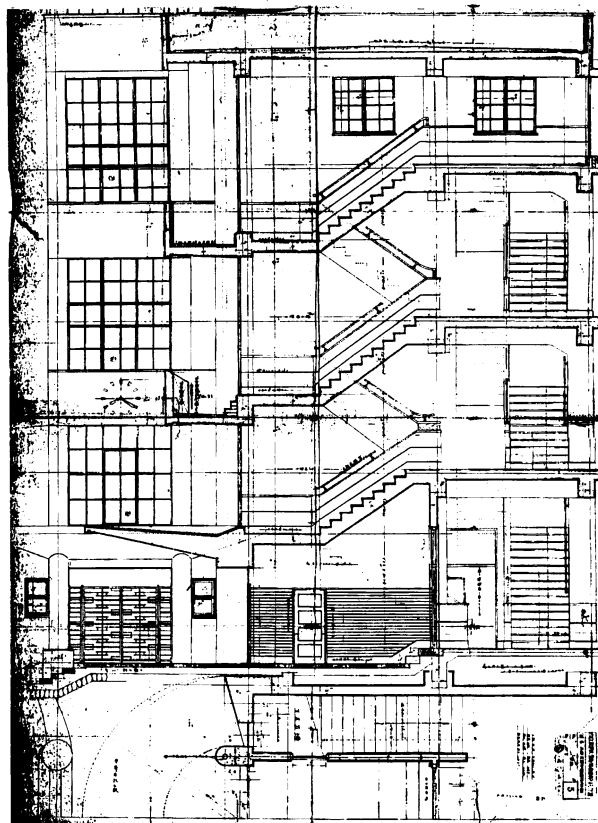
正面玄関にはキャンティレバーで若干反りながら前面に大きく張り出す円形の庇がつけられる〔図5〕。この庇は他の建物には見られない本建物の特徴的的部位である。

内部は装飾性を排し、機能主義的に設計されているが、玄関廻りに釉薬スクラッチ・タイルが貼られたり、東側の1階から2階へ至る階段部分に曲線を用いたデザインが採用されるなど若干の装飾的部位が見られる。

外壁の色は淡紅色を帯びた「ソリヂット・スタイン」仕上げであったとされる<sup>17</sup>。

建築の特徴 本建物は柱形と連続する庇、平板面による明快な立面構成が特徴であり、そのなかに円窓や円筒などの要素が効果的に配されることによって、建物全体のイメージが決定される。特に、円形のバルコニーと円形の庇を付けた中央の塔は、車寄せのデザインと一体とな

って建物全体のシンボリックな部分となっている。細部意匠では方形グリッド、幾何学模様が美しい。



〔図5〕高商部校舎「正面玄関甲階段詳細図」(市大大学事務局保管)

## 2) 予科校舎(2号館)

建築概要 鉄筋コンクリート造, 3階建一部地下1階

建築面積1,249㎡, 延床面積3,660㎡

第1期工事(S6.10起工 S8.3竣工)

設計: 大阪市土木部建築課

施工: 株式会社鹿島組

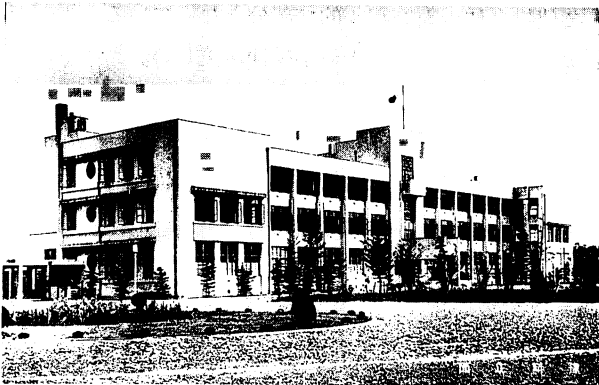
平面計画 平面は南北方向に長く、正面玄関を軸にはほぼ左右対称となる。棟の東側に廊下を通して西側を居室とする片廊下式の平面が採用され、棟両端の教室は、正面側に張り出すことで他より広い面積を確保している。

1階は教員室や庶務教務室など事務関係室に、2, 3階は教室、会議室などに使用されていた。

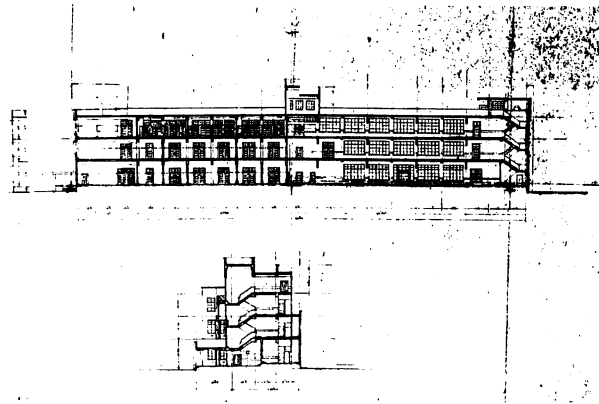
立面構成 正面玄関上部の塔を中心に左右対称の構成をとる〔図6〕〔図7〕。

高商部校舎と同様、塔の両側壁面では柱形を外にあらわし、建物両端の張り出し部分では、柱形のない平板面とされる。この構成は学部本館にも共通する。

庇については、西面の塔両側部分以外のすべての面で、窓の直上に連続する庇が付けられる。高商部校舎と比較すると若干厚く、また、デザイン要素として展開するこ



【図6】竣工まもなくの予科校舎正面 前掲絵はがきより（市大大学史資料室所蔵）



【図7】予科校舎「縦横断面図」（市大大学事務局保管）

となく窓上に止まっている。

円窓は、側面のみに開けられる。

意匠 中央玄関塔の縦に連続するガラス面に、幾何学形の棧が採用されており、本建物の正面を飾る意匠となっている [図8]。玄関廻の壁にはタイルが貼られるなど装飾的な処理が見られる。

窓は、矩形窓は方形グリッドで分割され、円窓には幾何学形の棧がはめ込まれる。

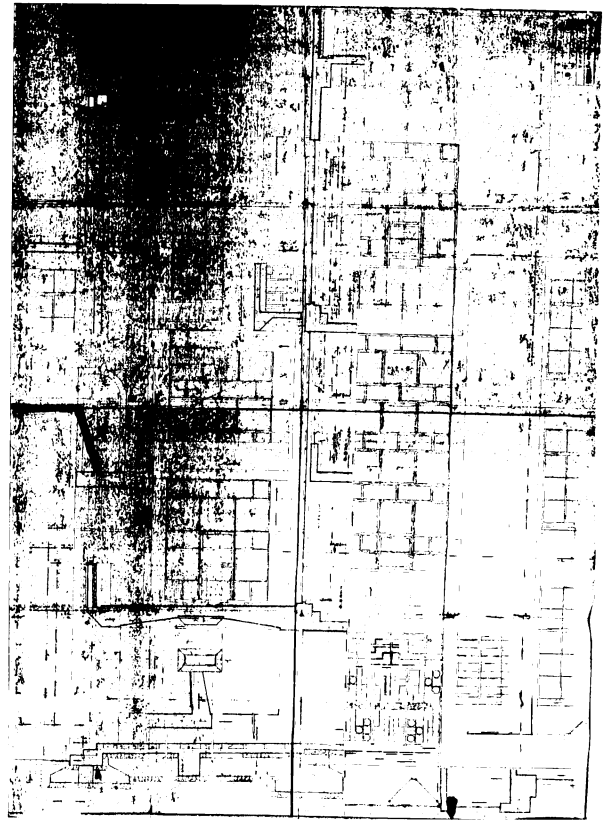
内部は機能主義的につくられているが、階段の手摺に円窓のデザインが持ちこまれるなど、装飾的な部分も若干確認される。

外壁の色は、高商部校舎と同じ色調で、淡紅色を帯びた「灰色リソイド」仕上げであったとされる<sup>18</sup>。

建築的特徴 本建物も柱形と庇、平板面（壁・窓）による立面構成をとる。また、円窓や幾何学模様などの意匠の採用も見られる。ただ、庇のデザイン的処理、柱と壁の構成などが、高商部校舎に比べ幾分洗練されていない印象を受ける。

### 3) 体育館（第1体育館）

建築概要 鉄骨鉄筋コンクリート造、平屋建、石綿板葺  
建築面積1,767㎡  
体育室476.5㎡



【図8】予科校舎「正面玄関詳細図」（市大大学事務局保管）

小講堂（ギャラリー、映写室付）

室内プール（長さ25m幅6m、3コース）

銃器室248㎡

外部シャワー室、ロッカー室、教官室、便所

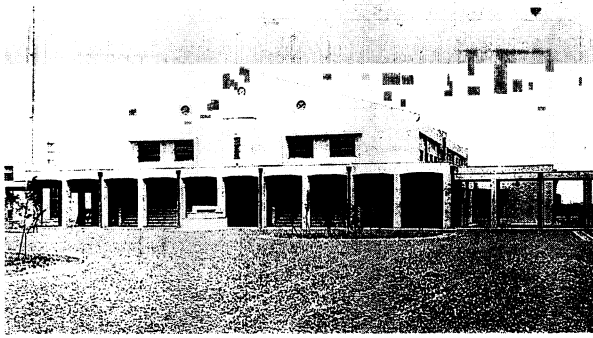
第1期工事（S6.10起工 S8.3竣工）

設計：大阪市土木部建築課

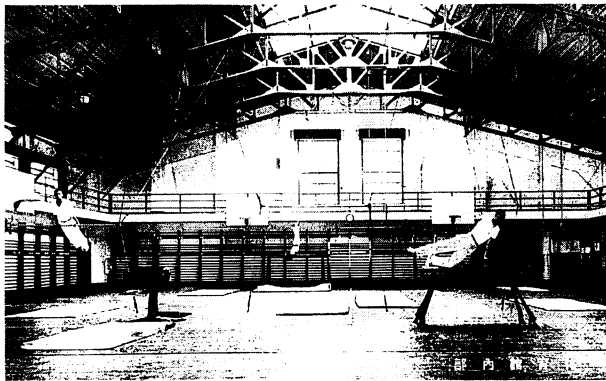
施工：株式会社鹿島組

平面計画 本体育館は、様々な施設が設備された複合施設として設計された。正面入口は西の広場に面して2ヶ所開かれ、入口を入ったところが講堂、その奥に体育室が位置する [図10] [図13]。講堂の外部3面には回廊が廻る。講堂は体育室より床面が若干高く、講堂と体育室の間の折たたみ戸を開くと体育室の観覧席となるよう設計されている。体育室の東側には、25m、3コースの室内プールと運動用具室が配置され、南側には予科銃器室、高商部銃器室が並ぶ [図11]。北側にはシャワー室、学友会室、教官室、便所が置かれる。

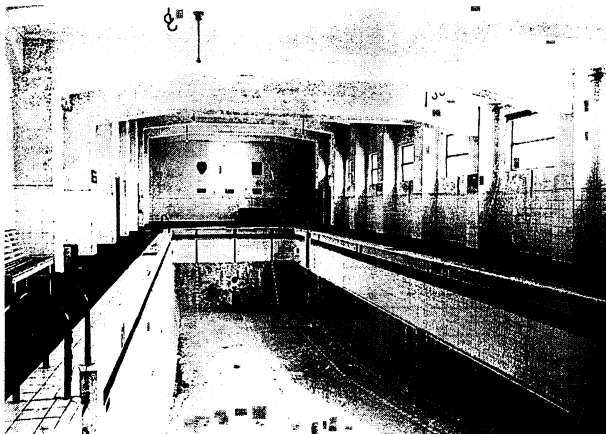
立面構成 切妻の妻面を正面に向け、正面入口上部に矩形の窓、さらに上部に円形の換気口を配する [図9]。側面にも連続的に窓が設けられる。体育室、講堂の上部にはトップライトが開けられる。窓ガラスはいずれも棧によってほぼ正方形に分割され、窓の直上には窓を縁取るように折れ曲がる庇が取り付く [図12]。



【図9】 竣工まもなくの体育館正面（市大大学史資料室所蔵）



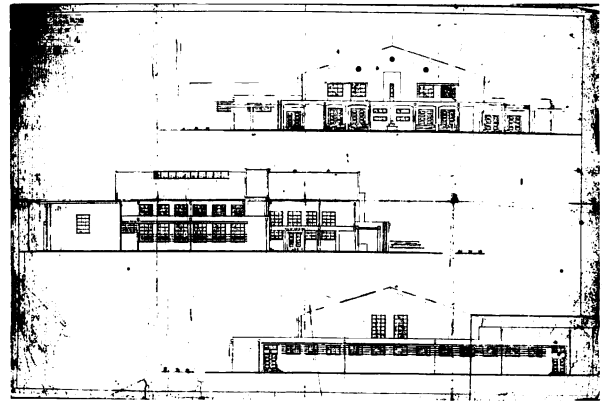
【図10】 体育館体育室内部 前掲絵はがきより（市大大学史資料室所蔵）



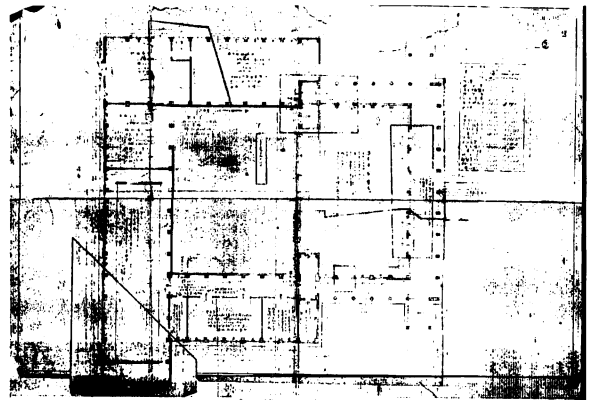
【図11】 室内プール（市大大学史資料室所蔵）

建築的特徴 本建築は、我国ではじめての「ステージ・ジムナジウム」（講堂兼体育館）であったことが注目される。当時の新聞や雑誌にも大きく取り上げられ、『大大阪』では、「ステージ・ジムナジウムはわが国学校建築最初のもので同大学の誇りとしてゐる」<sup>19</sup>とあり、同年の『新建築』でも「ここに注目すべきは我国最初のプランとしてステージジムナジウムを設けてあること」<sup>20</sup>とされる。

意匠的には平板面による壁面構成、正方形や円形要素の採用、連続する庇の付加といった特徴があげられる。



【図12】 体育館「各面立姿図」（市大大学事務局保管）



【図13】 体育館「第一階平面図」（市大大学事務局保管）

#### 4) 学部本館（1号館）

建築概要 鉄筋コンクリート造、3階建一部地下1階  
建築面積1,861㎡、延床面積5,785㎡

（講堂）鉄骨鉄筋コンクリート造、平屋建  
建築面積661㎡

収容人員1,404人

第3期工事（S7.12起工 S9.7竣工）

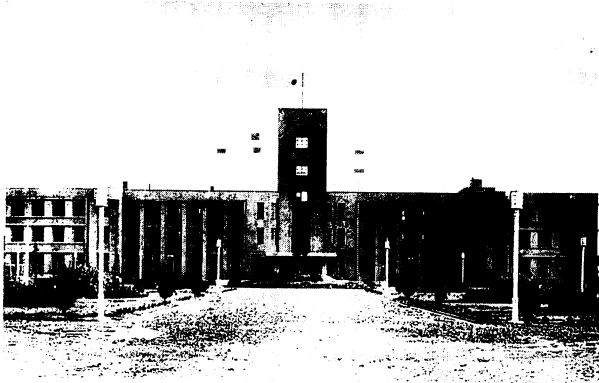
設計：大阪市土木部建築課

施工：株式会社鹿島組

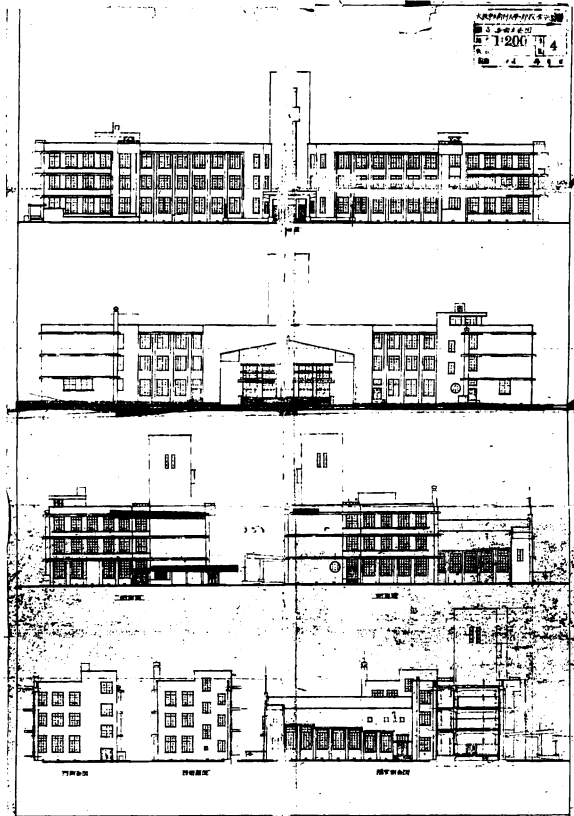
平面計画 棟は東西方向に長く、正面玄関を軸にほぼ左右対称の平面構成をとる [図16]。棟の両端では南側にウイングをのばして居室を設ける。講堂は1階正面玄関奥に置かれる。棟の南側に廊下を通して北側を居室とする片廊下式の平面で、両ウイングの居室へもこの廊下からアプローチする。

1階は学長室や庶務係室、会計係室をはじめとする事務関係室、2階は教室、研究室、貴賓室、3階は教室、研究室などに利用されていた。

立面構成 正面玄関上部の塔を中心に左右対称の立面構成をとる [図14] [図15]。塔は予科校舎、高商部校舎に



【図14】 竣工まもなくの学部本館 前掲絵はがきより (市大大学史資料室所蔵)



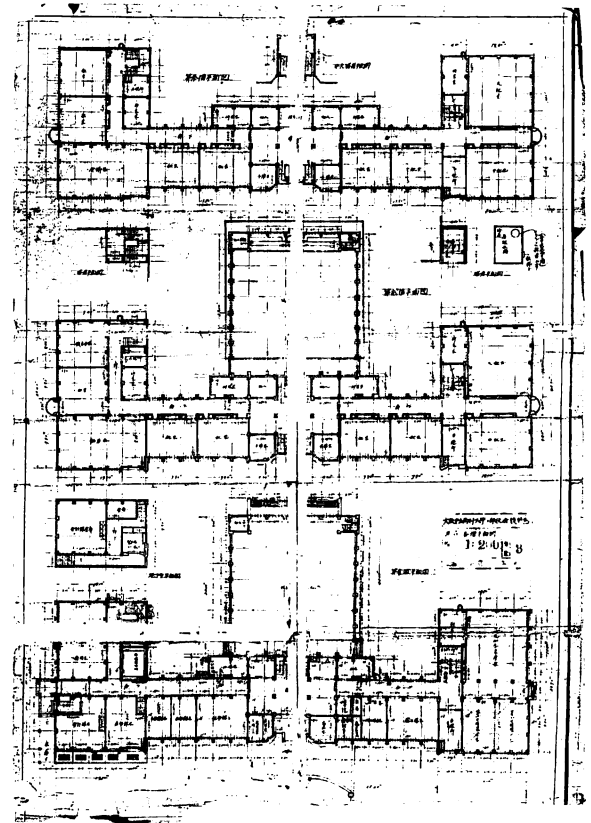
【図15】 学部本館「各面立姿図」(市大大学事務局保管)

比べ一段と高く設計され、学部本館としての存在をアピールする。

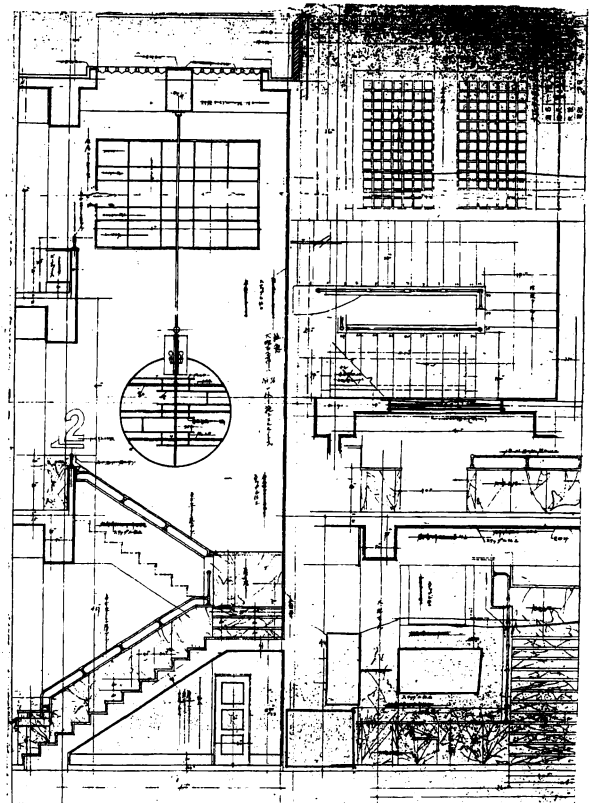
正面側壁面は、中央部分で柱形を外部にあらわし、両端部分では柱形のない平板面とする。壁面の切替え部分や両側面のバルコニーには円筒形のデザインが用いられる。

窓上に付けられた連続する庇は、窓の端で折れ曲がって地面へと伸びるもの、バルコニーのスラブと一体化するものなど、窓上のみ止まることなく壁面上を自由に展開する。

意匠 正面玄関の車寄せには高商部校舎、図書館・研究室と同じデザインが採用され、3つの車寄せのなかで本建物のものが最大である。



【図16】 学部本館「各階平面図」(市大大学事務局保管)



【図17】 学部本館「一階大階段詳細図」(市大大学事務局保管)

内部は玄関および階段室まわりで他の建物より装飾性が高く、タイルが貼られたりトップライトが設けられたりといった演出が見られる〔図17〕。細部意匠には、幾何学形が採用されている。

**建築的特徴** 本建物は予科校舎、高商部校舎と類似の平面・立面構成を採る。しかし、あとに設計されたためか、壁面の切り替えなどの構成や連続する庇の処理が、より洗練された形となってあらわれている。

また、垂直性の強調や矩形要素の多用など、他の建物に比べ権威性、象徴性を演出するデザインとなっている。これは学部本館という建物の性格を意識したものと思われる。

### 5) 図書館・研究室 (旧図書館)

**建築概要** 鉄筋コンクリート造, 2階建

(閲覧室: 平屋建, ギャラリー付)

建築面積1,740㎡, 延床面積2,827㎡

書庫: 鉄筋コンクリート造, 5階建, 塔屋付

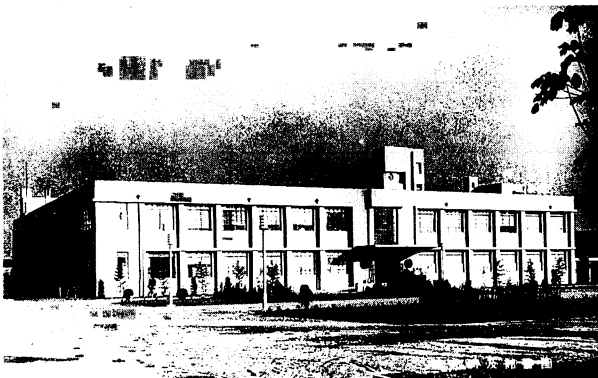
建築面積245㎡, 延床面積1,242㎡

書籍運搬用自動昇降機

第3期工事 (S7.12起工 S9.7竣工)

設計: 大阪市土木部建築課

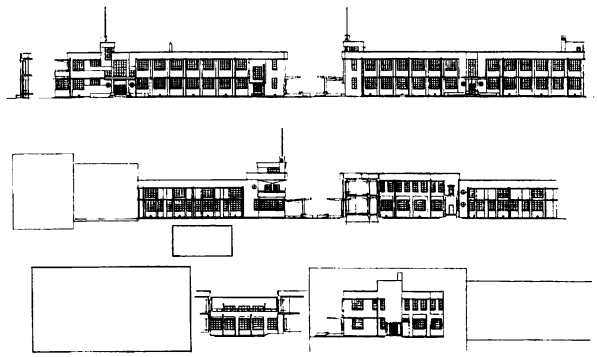
施工: 株式会社鹿島組



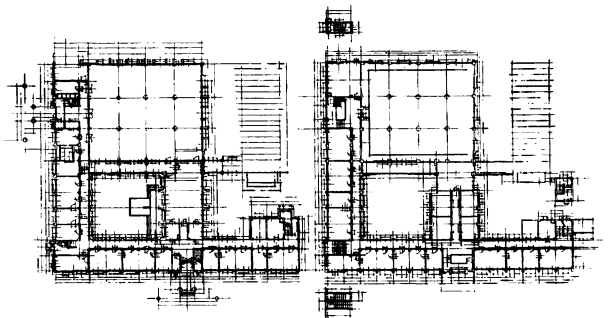
〔図18〕 竣工まもなくの図書館・研究室 前掲絵はがきより (市大大学史資料室所蔵)



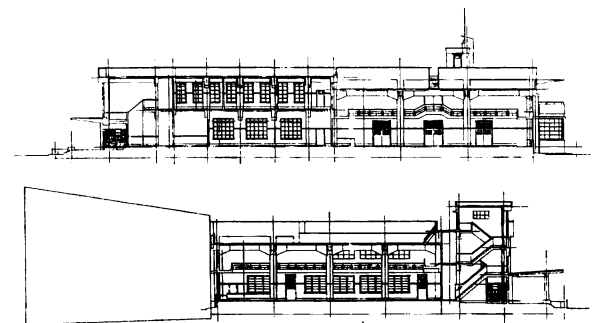
〔図19〕 図書館大閲覧室 前掲絵はがきより (市大大学史資料室所蔵)



〔図20〕 図書館・研究室「各面立姿図」(市大大学事務局保管)



〔図21〕 図書館・研究室「各面平面図」(市大大学事務局保管)



〔図22〕 図書館・研究室「断面図」(市大大学事務局保管)

**平面計画** 図書館・研究室棟は、北西に角のあるL字型の平面で、西面と北面にそれぞれ研究室と図書館の正面玄関を開く〔図21〕。書庫は、図書館・研究室棟の南東に位置する。

平面は、西棟では東側に、北棟では南側に廊下を通す片廊下式とされる。1階は西寄りが研究室、東の奥まった部分が図書館で、その取り合いには湯沸室や宿直室などが置かれる。2階は大半が研究室として使われていた。

図書館については、北玄関を入った奥に閲覧室があり、閲覧室の西側には書庫への通路が通される〔図19〕。棟の東端にある雑誌新聞閲覧室は、半円形プランのサンルーム的な空間となる。

**立面構成** 校舎がいずれも、玄関塔を軸にほぼ左右対称の構成を採るのに対し、図書館・研究室棟ではシメト

リーにこだわらない自由な設計が行われている [図18] [図20] [図22]。

西棟の西面は、玄関部分以外は柱形、連続する庇の帯、大きなガラス窓が開けられた平板面の3つの要素によって構成される。他の校舎においては、3階の窓上部にのみ庇を回し、1、2階の窓には庇を付けないことで、垂直性を損なわないよう設計しているのに対し、図書館・研究室棟では、1、2階共に庇を付けることで、垂直性よりむしろ水平性が強調される。

北棟の玄関ホール東側の壁面は、小さな塔となって壁面上部に突き出し、玄関の存在を主張する。北棟の東端には1階がガラス面、2階が手摺と庇で構成された円筒形のヴォリュームが取り付く。

意匠 玄関にはキャンティレバーでほぼ水平に張り出した矩形の庇が付く。現在は壁で塞がれているが、図書館の玄関部分もかつては、同じ意匠の庇が付けられていた。庇の先は薄く仕上げられ、その断面処理に建物全体が指向する水平性があらわれている。

西および北の正面玄関には、学部本館、高商部校舎と

同じ意匠の車寄せがつけられる。

図書館の玄関東脇に伸ばされた塔は、玄関の中央をはずすことで硬い印象を免れ、自由な構成を実現している。

図書館東端の円筒形部分は、円の中心に置かれた円柱が、1階から2階へと伸び、そして柱上部で広がってバルコニーの庇になるという感動的な展開を見せる。

建築的特徴 図書館・研究室棟は、校舎に求められた「学問の府」としての権威性、象徴性から自由であり、そのぶん設計者の建築理念が伸びやかに展開された建物といえる。

壁面に連続する庇の造形的処理は、この建物において徹底的に追求され洗練される。また、図書館東端に取り付いた円筒形のヴォリュームは、他の校舎にはみられない造形的空間を実現している。

全体としてデザインに破綻が無く、完成度の高い建物である。

[表2] 大阪市土木部建築課の構成員

技師課長		富士岡重一 (東京大M44)
庶務係	主事・主査	渡辺三彦
	書記	天原正久 土居節行 松山幾太郎
	雇	平野肇志 寺西喜一郎 桜井良三郎 中村郁治 井上正雄 増井仙治 小林春治
設計係	技師	伊藤正文 (主任兼工務課河川係・早大T6) 新名種夫 (京都大T13) 竹内政治
	技手	杉本虎之助 後藤寅之助 (兼市立市民病院技手 大阪高等工業T8) 八木幸助 (福井工業M38) 矢代幸三郎 田上辰馬 後藤節二 岡村如水 鴨田薫 本多正道 (京都大S2) 桐本楠雅 吉田清三郎 井手正雄 (京都大S3) 大野勝三郎 熊本一之 渡辺金蔵 (関西商工T12) 吉川悌治 渡辺久雄 内山哲郎 佐川伊佐夫 (福井高等工業S3) 宮田秀穂 森口正雄 沖増次 (桃山中学M45) 伊勢憲三
	臨時技手	宮崎正夫 (紫野中学T13)
	雇	田中芳郎 (関西商工T11) 伊勢谷忠夫 福山良三 (関西高等工S5)
	臨時雇	広瀬源三郎
	工事	新熊健三 渡辺正三 野村安太郎 塚安治 (今宮職工S2) 川西梅次郎 中村貞蔵
工事係	技師	大野直平 (主任) 三好貫一 (早大T7)
	技手	篠原清孝 (大阪市工業T2) 横山佐久馬 松下利八 尾藤英太郎 三品勝之助 (大阪市工業T2) 山上富 権藤友蔵 堀新作 青木周市 横田文夫 (兵庫工T7) 竹花末春 (早稲田大S2) 占部定一 (兵庫工T7) 青井要三 森川喜代之助 小早川謙治 (大阪市工業T9) 本郷忠夫 長谷川吉次 (兵庫工T10) 村井等昌 (大阪市工業T12)
	臨時技手	片倉正
	雇	下村捨三 (大阪市工業T15) 加村寅太郎 長谷晃寛 谷垣宣二 出口幸三 赤岩四郎 馬場和夫 篠原実 大津敏晴
	臨時雇	本郷孝
	工事	佐藤健次郎 吉本一夫 福本米治 市川外勇 柳澤瞭 (今宮職工T13)

「大阪市職員録」(昭和7年7月1日現在 大阪市役所秘書課 昭和7年8月発行) より



### 3 杉本キャンパスの設計組織と 近代モダニズム建築運動

#### 3-1 大阪市建築課の組織と技術者

杉本キャンパスの建築を設計した大阪市土木部建築課とは、どのような組織であったのか。当時の人員構成は、昭和7年(1932)の「大阪市職員録」<sup>21</sup>から知ることが出来る。名簿を整理したものが[表2]である<sup>22</sup>。

名簿によると、建築課は技師課長富士岡重一(1886~1958)<sup>23</sup>以下、庶務係11名、設計係37名、工事係36名で組織され、うち設計係は、技師3人、技手23人、臨時技手1人、雇3人、臨時雇1人、工手6人となっている。

名簿にあげられた技術者のなかには、建築家として一線で活動した人物も確認される。なかでも、設計係技師の伊藤正文(1896~1960)<sup>24</sup>、新名種夫(1902~1952)<sup>25</sup>は、モダニズムの探求者として日本の建築史上に足跡を残した建築家であった。当時の大阪市では、こういった人物の主導によって、建築界をリードする公共建築が次々と造られていたのである。

伊藤正文は、大阪市立美術館(1936)や室戸台風の復興事業として一連の市立小学校校舎などを手がけた。また、新名種夫は大阪市立電気局庁舎(1930)をはじめ、大阪市立桃山病院(1930)、大阪電気科学館(1937)など多くの名作を残している。

杉本キャンパスの建設は、当時技師主任の職にあった伊藤正文を中心に進められたことが判明しており<sup>26</sup>、伊藤以下、課内の技術者集団によって設計が行われた。

#### 3-2 「日本インターナショナル建築会」と大阪市建築課

伊藤正文をはじめ当時の大阪市建築課には、昭和2年(1927)年に結成された建築運動組織「日本インターナショナル建築会」(以下、建築会)<sup>27</sup>に参加した技術者が数多く在籍した。

昭和5年の建築会の名簿<sup>28</sup>と同7年の市建築課の名簿を照合すると、常務会員に設計係技師の伊藤正文、新名種夫、客員に建築課長の富士岡重一、研究会員に設計係では技手の矢代幸三郎、本多正道、宮田秀穂、雇の田中芳郎、伊勢谷忠夫、福山良三、臨時雇の広瀬源三郎、工手の野村安太郎、塚安治、中村貞夫、工事係では技手の青木周一、雇の加村寅(富)太郎、赤岩四郎、工手の柳澤瞭の計17名の名前が重なる。市建築課の技術者74名のうち17名、設計係のみについて言えば37名中、12名が建築会に参加していたことになる。

当時、建築界に巻き起こっていたモダニズムのムーブメントは、市建築課のなかにも多くの賛同者を得たのである。

### 4 杉本キャンパスの建築と 「日本インターナショナル建築会」

「日本インターナショナル建築会」は、昭和2年(1927)の結成から6年後の昭和8年に、早くも解散するが、その理念は大阪市の作品に少なからず影響を及ぼした。

建築会は、その「宣言」と「綱領」において、「人類の生存」あるいは「人類の進展」を念頭に、「世界各国の同志と連携して共同の目的に向かう」という《インターナショナル》な建築のあり方を希求しつつ、「日本における問題解決に基本を置いて」、「真正なる「ローカリティ」を根底に置く」といった、「狭義の国民性に固執」しない日本固有の《ローカリティ》を求めることを標榜する[図23]<sup>29</sup>。さらに、その具体的方策として《インターナショナル》と《ローカリティ》という相矛盾する概念を融合させ、「必然的に生るべき様式を建設」する必要を主張する。

## インターナショナル建築

ARKITEKTURO  
INTERNACIA  
AUGUSTO 1929

JARO 1 N-RO 1

第一号

八月

創刊號

日本インターナショナル建築会

[図23]『インターナショナル建築』1929、8月増刊号表紙(伊藤正文デザイン)

この問題に一番積極的に取組んだのは、伊藤正文であったといわれる<sup>30</sup>。建築的に《インターナショナル》と《ローカリティ》を同時に解決する方法として伊藤が行き着いたのは、日本固有の風土が生み出した「庇」や「軒」、「大きな開口部」といった形態的《ローカリティ》を、科学技術という《インターナショナル》な手段によって分析・理解し、そして再現することであった。つまり、《インターナショナル》を科学的・技術的側面に求め、《ローカリティ》を形態的側面に見出したのである。それは後に、衛生工学の分野を通して実現され、「遮光庇」や「ホッパー窓」といった具体的提案として示される<sup>31</sup>。

杉本キャンパスの建築は、建築会の活動が軌道に乗り始めた昭和6年に設計されており、模索段階ではあるも

の、これらの建築には伊藤らによる《インターナショナル》と《ローカリティ》との融合的解決を具体化する試みが見てとれる。

杉本キャンパスの建築は、基本的に幾何学形のヴォリュームによる構成、平滑面による表現、幾何学形の意匠といった《インターナショナル》なスタイルでまとめられている。しかし、そこに庇や柱形といった《ローカリティ》の要素を効果的に付加することで、両者の融合ははかれる。

この設計手法は、第1期工事の予科校舎、高商部校舎より第3期工事の学部本館、図書館・研究室において、より洗練されたかたちで展開される。杉本キャンパスの建築に、彼らの理論実践の過程を辿ることができる。

### 5 設計者・伊藤正文について

設計を主導した伊藤正文とはどのような人物であったのか [図24]。実は、彼と大阪市立大学との関係は、建物の設計者という以上に深い。伊藤の経歴を整理したものが [表3] である<sup>32</sup>。



[図24] 伊藤正文

伊藤正文は、大正6年(1917)に早稲田大学理工学部建築学科を卒業し、辰野片岡建築事務所を経て、同13年7月、大阪市の技師に就任する。その後、昭和14年(1939)1月に退職するまでの14年半を大阪で過ごした。大阪市技師時代には、大正13年の都市計画広路橋梁設計競技二等当選(大阪市)をはじめ、14

年には第一回大阪市展の時事新報社賞を受賞するなど、市の技術者としてだけでなく、一建築家としてさまざまな活動を展開した。なかでも重要なのは、「日本インターナショナル建築会」の活動であり、その結成から解散まで中心メンバーとして活躍する。この頃の伊藤は、大阪市技師としての仕事の他に、〈自邸〉(1929)や〈野上博士の家〉(1929)〈夙川の家〉(1929) [図25]をはじめ個人的な作品にも精力的に取り組んでいた<sup>33</sup>。

昭和8年の建築会の解散後は、もっぱら学校建築における採光や通風など、建築衛生工学分野の研究に没頭する<sup>34</sup>。こうした衛生工学研究へと向かう伊藤の姿勢は、建築会における活動への決別ではなく、むしろその理念を突き詰めた先に見出した道だったといえる。

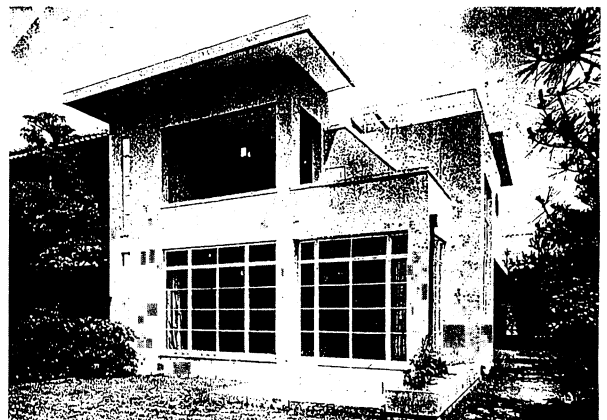
伊藤の生涯において大阪市技師時代は、モダニズム建築運動の活動家として、さらには衛生工学の研究者として、最も精力的に活動した時代であった。

その後伊藤は、大阪市立大学創立の年、昭和24年4月、家政学部初代教授に着任する。工学部からも打診があったが、女子の建築教育を推し進めたいとしてこれを断り、家政学部教授の道を選択したという<sup>35</sup>。着任以降は、学部長をつとめるなどその中心となって研究教育に尽力した。学科内では住居意匠学講座を担当し、大阪市技師時代から取組んできた建築衛生工学の研究を引き続き展開している。

伊藤は家政学部における建築教育において、パウハウ

[表3] 伊藤正文略年譜

和暦	西暦	月日	事項
明治29	1896	3月	23日 誕生
大正2	1913	4月	早稲田大学高等予科入学
3	1914	7月	同 終了
		9月	早稲田大学理工学部建築学科入学
6	1917	7月	同 卒業 <学業優秀賞受賞>
		7月	辰野片岡建築事務所入所
12	1923	8月	大阪市技手・市庁舎建築係洋命(事務所特派員として)
13	1924	12月	日本建築士会客員・大阪市美術協会建築部会員
		2月	片岡建築事務所依願退職
		7月	大阪市技師着任
14	1925	10月	都市計画広路橋梁設計競技二等当選(大阪市)
15	1926		第一回大阪市展出品 時事新報社賞受賞(大阪市美術協会)
昭和2	1927	11月	大阪市美術協会洋画部会員
8	1933	7月	「日本インターナショナル建築会」結成に参加
			「日本インターナショナル建築会」解散
		11月	イタリア国世界工芸博覧会出品感謝状を受ける
12	1937	4月	昭和12年度学術研究奨励賞を受ける(日本学術振興会)
13	1938	7月	大阪市教育部建設課長着任
14	1939	10月	樟蔭女子専門学校講師
		1月	大阪市依願退職
		1月	神戸高等工業学校講師
		5月	昭和13年度 建築学会学術賞受賞
15	1940	9月	工学博士の学位を受く(早稲田大学)
		3月	樟蔭女子専門学校依願退職
		4月	早稲田大学講師
17	1942	12月	大阪府労働科学研究会委員
18	1943	11月	大阪府工場建築協会参与
19	1944	4月	京都工業専門学校講師
21	1946	3月	神戸工業専門学校依願退職
		9月	早稲田大学依願退職
		9月	「日本造形文化研究所」設立
23	1948	11月	日本建築学会近畿支部学術員
24	1949	3月	京都工業専門学校依願退職
		4月	大阪市立大学家政学部教授着任
34	1959	3月	大阪市立大学家政学部退職
55	1980		死去



[図25] 夙川の家(伊藤正文・1929)

スの教育プログラムを意識していたとされる<sup>36</sup>。これは、「日本インターナショナル建築会」が目指したもののひとつであり、建築会の解散から15年以上たって、ようやくその実践の場を得たといえる<sup>37</sup>。非常勤講師にも、建築会の常務委員であった上野伊三郎や客員の桐本楠雅、上野リックスなどを起用するなど、建築会とのつながりが見え隠れする<sup>38</sup>。伊藤の建築設計や建築教育に対する理念は、建築会の活動に深く根ざしたものであり、彼は、建築会の理念を生涯にわたって展開したのである。

大阪市立大学には昭和34年3月まで在籍し、その後、55年に64歳で没している。

彼の事跡を振り返ると、大阪市技師時代が建築家としての時代であったとするならば、大阪市立大学教授時代は、教育者としての時代であったといえる。伊藤の生涯において杉本キャンパスは、自己の作品であるとともに、自身の建築教育の場でもあるという二重の意味を持つ場所となった。

## おわりに

杉本キャンパスの建築は、「日本インターナショナル建築会」の6年間という短い活動期間中に、建築会の中心メンバーであった伊藤正文ら大阪市建築課の技術者によって設計された。これらの建物は、建築会が追求したモダニズム建築の昭和6、7年時点でのひとつ到達点として捉えることができる。

その建築的特徴は、以下のように整理される。

- ・幾何学形ヴォリュームの抑制の効いた組合せ
- ・平板面（壁・窓）と柱形、庇による立面構成
- ・壁面上を自由に展開する庇の処理
- ・幾何学形の細部意匠の採用

これらの特徴は、建築会の掲げた《インターナショナル》と《ローカリティ》の融合という課題に対する、伊藤らの具体的解決策を示している。伊藤らは、幾何学形のヴォリュームと平板面による明快な全体構成、構造的・技術的側面に《インターナショナル》を、そして庇や柱形といった付加的・形態的部位に《ローカリティ》を求めたのである。

建築会の活動を知る現存作品が少ない中で、このような建築背景、建築的特徴を持つ杉本キャンパスの建築は、近代モダニズム建築の貴重な遺構として、また伊藤正文を中心とする戦前の大阪市建築課の代表的作品として近代建築史上、重要な建築群といえる。

本論の作成にあたり、大阪市立大学事務局管理課・大学史資料室のみなさま、京都工芸繊維大学の笠原一人氏

には資料提供において多大なご協力を頂きました。ここに記して謝意を表する次第です。

## <註>

- 1 例えばリストでは、日本建築学会『日本近代建築総覧』技報堂出版株式会社、1980、pp.315、モダニズム建築運動家・伊藤正文の作品として紹介したものに、石田潤一郎『関西の近代建築』中央公論美術出版、1996、pp.104、などがある。
- 2 大阪商科大学は大阪市立高等商業学校が、昭和3年の大学令の改正を受けて大学に昇格したものである。『大阪市立大学百年史』上巻、大阪市立大学百年史編集委員会、1987、pp.109-130、『大阪商科大学六十年史』大阪商科大学六十年史編纂委員会、1940、pp.315-16。
- 3 前掲『大阪市立大学百年史』上巻、pp.105。
- 4 前掲『大阪市立大学百年史』上巻、pp.139。
- 5 当時の新聞には、「正式に許可された大阪市立商科大学の新校舎敷地についてはかねて市当局において銓衝中であった2、3の候補地があり、目下各方面の事情、関係を考慮し審議を進めてゐるが（中略）目下のところ市が最も有力視してゐるのは住吉区の元依羅村付近で、市の交渉も今一息といふところまで漕ぎ付けた模様で、恐らく同地に決定されるのではなからうかと観られてゐる。同地は将来市の高速度鉄道竣工の際の終点付近に位してをり、交通の便もよく学校敷地としては最好適の位置といはれてゐる」（『大阪朝日新聞』1928年3月24日）と報道されている。
- 6 前掲『大阪市立大学百年史』上巻、pp.140。
- 7 前掲『大阪商科大学六十年史』pp.362。
- 8 前掲『大阪市立大学百年史』上巻、pp.140-1、前掲『大阪商科大学六十年史』pp.391。
- 9 前掲『大阪商科大学六十年史』pp.391。
- 10 前掲『大阪商科大学六十年史』pp.391-3、前掲『大阪市立大学百年史』上巻、pp.141-2。
- 11 前掲『大阪商科大学六十年史』pp.401。
- 12 前掲『大阪商科大学六十年史』pp.400-1、前掲『大阪市立大学百年史』上巻、pp.141-2。
- 13 『大阪朝日新聞』1935年11月8日、同9日。
- 14 「大阪商科大学予科及高商部校舎」、『新建築』新建築社、1933年4月号、pp.89-94。
- 15 「商科大学関係測量図綴」臨時校舎建設所、1934年、「新学舎竣工記念絵はがき」大阪商科大学、1935年、大学関係写真（建物ほか）、「大阪商科大学同窓会会報」大阪商科大学同窓会など。

- 16 富士岡重一「工事報告」前掲『大阪商科大学六十年史』 pp.399-401, 本協会編集部「大阪商科大学六十年小史」『大大阪』1941年1月第17巻1号, pp.80-104。
- 17 前掲「大阪商科大学予科及高商部校舎」『新建築』新建築社, 1933年4月号, pp.89。
- 18 同上。
- 19 「新施設を誇る商大の新校舎」, 『大大阪』, 1932年11月第8巻20号, pp.904-5。
- 20 前掲「大阪商科大学予科及高商部校舎」『新建築』新建築社, 1933年4月号, pp.89。
- 21 「大阪市職員録」昭和7年7月1日現在, 大阪市役所秘書課, 1932年8月発行, pp.266-8。
- 22 出身校については, 建築関係大学・学校の名簿と, 川島智生「昭和戦前期の大阪市における小学校建築の研究—臨時校舎建設所の組織とその建築について」『建築史学』第31号, 1998年, pp.116によった。
- 23 富士岡重一は, 明治44年に東京帝国大学建築学科を卒業, 東京の三橋建築事務所に勤めた。三橋建築事務所に在籍中は, 東京市の小学校建築を数多く手がけている。その後, 朝鮮総督府技師に転じ, 昭和2年, 校舎係技師として大阪市建築課に就職し, 同18年まで在籍した。東京時代から学校建築に精通しており, 大阪市在職中には, 室戸台風後の小学校校舎復旧のため昭和10年に設置された臨時校舎建設所の初代課長にも就任している。(前掲川島智生「昭和戦前期の大阪市における小学校建築の研究—臨時校舎建設所の組織とその建築について」『建築史学』 pp.144。)
- 24 伊藤正文の経歴については, 本稿5参照。
- 25 新名種夫は, 大正13年に京都帝国大学建築学科を卒業し, 大阪市に勤めた。「日本インターナショナル建築会」の設立当初からの会員であり, 建築会の中心人物として活躍した。大阪市の仕事として, <大阪市立電気局庁舎> (1930) やをはじめ, <大阪市立桃山病院> (1930), <大阪電気科学館> (1937) など, 多くの名作を残している。文筆活動にも積極的に取り組み, 建築界の論客として知られた。(前掲『関西の近代建築—ウォートルスから村野藤吾まで』 pp.104。)
- 26 前掲「大阪商科大学予科及高商部校舎」『新建築』新建築社, 1933年4月号, pp.89。
- 27 「日本インターナショナル建築会」は, 本野精吾 (1882~1944), 上野伊三郎 (1892~1972), 石本喜久治 (1894~1969), 中尾保 (1895~1963), 伊藤正文 (1896~1960), 新名種夫 (1902~1952) の6名によって昭和2年7月2日に結成されたモダニズム建築運動組織。会員はB.タウトやW.グロピウス, G.リートフェルト, R.ノイトラなど海外の著名な建築家などを含み, 最も多い時期で200人近くにのぼった。「インターナショナル建築会」については, 久保田正一「日本インターナショナル建築会について—その主張と展開」, 1998年度京都大学修士論文, 前掲『関西の近代建築—ウォートルスから村野藤吾まで』 pp.103-105に詳しい。
- 28 「日本インターナショナル建築会会員」『インターナショナル建築』日本インターナショナル建築会, 1930年2月第2号, pp.29-30。
- 29 「日本インターナショナル建築会」宣言・綱領, 『インターナショナル建築』日本インターナショナル建築会, 1929年8月創刊号, pp.1-2。
- 30 伊藤による「インターナショナル」と「ローカリティ」に関する言説については, 笠原一人「伊藤正文」(『建築文化』2000年1月第55巻639号, pp.141), において詳しく述べられている。
- 31 「遮光庇」「ホッパー窓」などについては, 伊藤正文「教室の採光方法に関する一研究」『日本建築学会大会論文集』, 1936年3月号, pp.244-53, 伊藤正文「Hopper窓の機構」『建築と社会』1937年4月号, pp.8-12, 伊藤正文『建築保健工学』第1部, 工業図書, 1938年, 伊藤正文『学校建築小論』相模書房, 1951, pp.58-62など多数の論文, 研究書が発表されている。
- 32 以下の経歴については, 伊藤正文, 自筆「履歴書」(「昭和二十四年四月起 職員任免内申綴 家政学部」大阪市立大学生生活科学部所蔵) ほかによった。
- 33 「日本インターナショナル建築会」での伊藤の役割や活動, 作品については, 前掲久保田正一「日本インターナショナル建築会について—その主張と展開」, 前掲笠原一人「伊藤正文」, 笠原一人「日本インターナショナル建築会」における伊藤正文の活動について『平成12年度日本建築学会近畿支部研究報告集』 pp.90-92, に詳しい。
- 34 伊藤は衛生工学の分野で, 昭和13年度日本建築学会学術賞を受賞し, 翌年9月には早稲田大学から建築衛生工学分野で工学博士号を授与されている。なお, 伊藤の小学校建築における衛生工学研究の実践については, 前掲, 川島智生「昭和戦前期の大阪市における小学校建築の研究—臨時校舎建設所の組織とその建築について」(pp.113-52) に詳しい。
- 35 伊藤は戦時中には女子建築技術者の養成講座「婦人建築・工芸研究所」を開き, 戦後は「日本造形文化研究所」を主宰した。『大阪市立大学百年史 部局編』下巻, 大阪市立大学百年史編纂委員会, 1983, pp.900。
- 36 前掲『大阪市立大学百年史 部局編』下巻, pp.900,

『生活科学部の五十年』生活科学部創立50周年記念誌  
編集委員会, 1999, pp.95。

37 久保田正一は、「日本インターナショナル建築会」の  
「綱領」の2番目に掲げられた「研究及創作の範囲は建  
築を中心として人間の生活に関する総てを含む」とい  
った理念が、「バウハウスの理念と全く同一のことを  
述べている」と指摘したうえで、「日本インターナシ  
ョナル建築会の目指すところもこれに近いものではあ

ろうが、バウハウスと並べてみた上での明らかな相違  
点は、教育機関を伴わないこと」と述べている（前掲  
「日本インターナショナル建築会について—その主張  
と展開」pp.45）。

38 前掲『大阪市立大学百年史 部局編』下巻, pp.898,  
の非常勤講師の名簿, 前掲「日本インターナショナル  
建築会会員」『インターナショナル建築』1930年2月  
第2号, pp.29-30, による。

### Summary

This paper is a report of the modern architectures of Osaka City University. In Sugimoto-campus of Osaka City University, there are five architectures were built in the late Modern period. These architectures were designed by Masabumi Ito under the influence of the activities of 'The International Architectural Association of Japan'. Now we have few Modern Architectures which were built under the modernism movements like 'The International Architectural Association of Japan', so it is indispensable to make it clear that these architectures are important for studying Modern Architecture in Japan in that time. This paper indicates that the distinctive features of these architectures, the special circumstances of making these designs and the worth of these architectures as Modern Architecture in Japan.